

# HOKKAIDO ARCHITECTSの横顔

PROFILES

vol.04

## 今号の建築家

インタビュー

INTERVIEW

近況ニュース 12



圓山彬雄

YOSHIO MARUYAMA

02



保科文紀

FUMINORI HOSHINA

06

自己紹介

MY PROFILE

野村和也

KAZUYA NOMURA

08

弘田亨一

KOICHI HIROTA

09

堀尾浩

HIROSHI HORIO

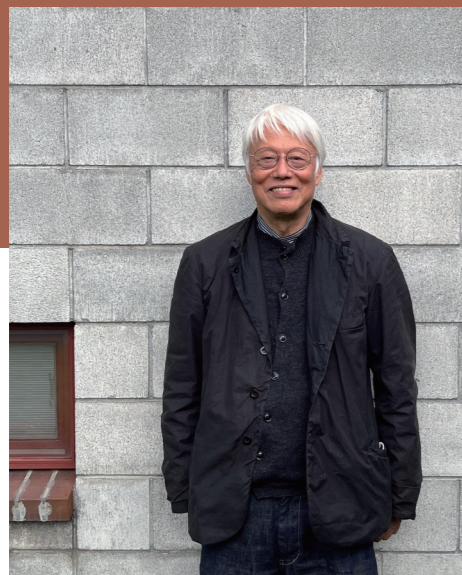
10

鳥海良晴

YOSHIHARU TORIUMI

11

## 北海道にしかないものが造れるに違いない



“ブロックの圓山”との異名をとる圓山彬雄さん。

北海道ならではの、こだわりのブロック造住宅を多数手がけ、

その良さを絶やすまいと、若い人たちと新たな試みに励む。

“ブロック愛”とも言える熱意は止まるところを知らない。

## 圓山彬雄

Yoshio Maruyama

(株) アーブ建築研究所 代表取締役  
JA 登録建築家 / 1987 年入会  
名誉会員 (2015)  
(2004-2007 年 北海道支部長)

## 略歴

1942 年 新潟県生まれ。1967 年 北海道大学大学院工学研究科修士課程修了。1968 年 室蘭工業大学講師。1971 年 上遠野建築事務所入所。1978 年 アーブ建築研究所創設。1980 年 (株) アーブ建築研究所代表取締役。受賞等：1987 年 第12 回日本建築学会北海道支部北海道建築賞 (一連の住宅の設計)、2002 年 第31 回札幌芸術賞 (寒冷地における住宅作品)、2013 年度 第13 回 JIA25 年賞 (外断熱ブロック住宅 高柳邸)、等

## 北海道で芽生えた想い

圓山さんの建築家としての原点は、1961 年、北海道大学(北大)に入学して間もなく目にした風景にある。まだ雪の残る札幌郊外で玉ねぎ畑の向こうに建ち並ぶ赤や緑(青)の三角屋根の住宅群。それらは北海道における防寒住宅の取り組みで外すことのできない、いわゆるブロック三角屋根住宅だった。圓山さんは、生まれ育った本州とはまるで違う住宅地の風景に衝撃を受けたと同時に、以降、抱き続けることとなる想いが芽生えたと言う。「北海道にしかないものが造れるに違いない」。

## 設計を志望し、環境的視点で学ぶ

新潟で生まれ、小学校から高校まで東京に住んだ圓山さんは、大学進学ではじめて北海道の地を踏んだ。入学した北大は、1



ブロック三角屋根住宅群。1950 年代後半～80 年代、北海道住宅供給公社が道内主要都市に12,000 棟を供給。写真は札幌市北区屯田。圓山さんが目にしたのは同じ北区の「ひまわり団地」だと言う

年次は学部は垣根なく教養課程で学び、2 年次に専攻を決める時が来る。当初は就職に有利だろうとの理由で工学部を選択していたが、次第に文化系もいいと思うようになっていたそう。各学部・学科の先生方による学科説明会の際には、獣医学部にも惹かれたとか。担当の先生の話が面白く、「建築に行かなかったら獣医に行っていた」と。しかし建築に決めたのには、説明会に現れた建築の先生、堀江悟郎さん(後に京都大学名誉教授)の出で立ちが大きく影響した。「長躯瘦身に、フラノズボンに厚手のウールのジャケットで蝶ネクタイさ。すごく颯爽として、言ったことは覚えていないけど、建築家っぽい感じがしてさ」と。また、建築に対しては理工系の中でも文化的なイメージを持っていたことも決め手になった。

設計を志望していたが、堀江さんの専門は建築環境(かつては建築計画原論)で、当時、設計の先生は太田實さんだった。ところが、圓山さんには太田さんの教えは響かなかったようで、学部を終えて大学院に進んだ時には堀江さんの研究室に入った。

堀江さんは視野が広く、学生へのアドバイスでは、建築の専門書よりもそれぞれの学生に合わせて教養を広げられるような本や役立つことを教えてくれる、見識の高い方だったそう。「環境っていうのを僕らがわからなかったせいもあるかな。なんでもありみたいなスケールだからね、話としては」と言うが、具体的な教示もあった。当時登場したアルミサッシについて、使い方を間違えていると指摘。「内側にやらなきゃいけないんだ

よって、もう当時から言ってたわけさ」と。外側をアルミサッシ、内側を木製建具にして、発生した結露水が凍りつき、窓が開かなくなったりしていたが、堀江さんは「気密性のある方を内側にすれば両方が動くんだよ」と言ったそう。また、海外のディテールに見られた(壁面の)空気層を疑問に思っていると、「空気層があれば、そこで湿気を逃すことができる」とか、「表面の結露が直に室内側に来ないようにするために空気層があるんだ」と言っていたとか。環境技術的な話は面白く、北海道でなければわからないことを知るうちに、圓山さんは「これは北海道にしかできない住宅はあり得る」と思ったそう。

そうした学びがありつつも、設計志望だったため、最後は太田さんの研究室の指導下で修士論文を書くことに。取り組んだのは、セマンティックの評価を用いて都市景観の評価軸をどう作るかというものだったとか。なお、この修士時代に、設計演習を教えに来ていたという上遠野徹さんに出会っている。

## 大学講師になるも、実際の建築を造りたい

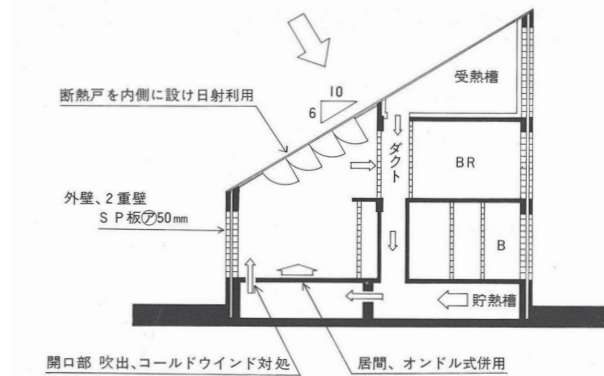
修士修了後は、釧路高等専門学校の教員職の話があったが、室蘭工業大学の菊池弘明さんの助言から、菊池さんの研究室の助手となり、翌年には図学の講師になって、計4 年を勤めた。

その間、菊池さんを手伝って道南の文化会館の設計に関わったり、「北海道に建つ明日の住まい」建設コンクール(住まいのクワザワ社と北海道新聞社の共催)に応募し、優秀賞をとった住宅案が北海道大博覧会(1968 年、開道100 年記念事業)で「理想の寒地住宅」として建設され展示された。その一方で、北欧旅行でアルヴァ・アアルトなどの建築を見る機会があり、特にフィンランドの『クルトゥーリタロ(文化の家)』に感激。「内部空間の力というか、空気の塊、形がすごいなあと思った。柔らかい空間だった」と言う。そんな経験から、建築を造りたいという気持ちが高まっていたそう。

## 上遠野徹さんの下で北海道の建築の造り方を学ぶ

そこで、実務を学ぶため、上遠野さんの設計した住宅に関心があったことから、まずはアルバイトを紹介してもらおうと、竹中工務店の設計部長だった上遠野さんを訪ねた。大学を辞める年の1 月だった。なんと上遠野さんは独立するらしく、タイミングがぴったり。「3 月で辞めるんだ、来る？」となり、いきなり上遠野建築事務所のスタッフになることに。その4 月から、名作・上遠野邸の居間で、T 定規と三角定規で図面を描き始めた。ところが、実施設計は未経験。「コンクリートの表現の仕方まで教わったからね」と、初歩的なところからのスタートだったよう。

清家清さんの話をしたり、ディテールの勉強もしながら、寒い北海道での暮らしを豊かにする技術や工夫を重ねていた上遠



“ブロック住宅ベスト5”の圓山案(断面図)。正方形の平面で大きな吹き抜けを持つオープンな空間構成。ブロック二重積みに加え、塔屋のガラス面からの太陽熱が地下の貯熱層へいたり、所要室へ熱流循環する仕組みを考案(『魅力あるメソソニー住宅』より。1978 年、社団法人北海道建材ブロック協会編集発行)

野さんの姿を見ながら、圓山さんは北海道の建築、住宅の造り方を学んだ。「デザインよりもディテールを教わった感じがある。基本的な環境技術だね」と言う。それから、上遠野さんはいみじくも「公共建築が良いことは大したことではなくて、その土地に住んでいる人たちの家が良いことが一番大事じゃないか」と話していたとか。その考えは、圓山さんに「北海道むきの住宅を造れるかもしれない」という想いを強くさせた。そして、上遠野さんとは違う路線を模索する中で、ブロック造住宅に着目していく。

## ブロック二重積み外断熱住宅に独自路線を見出す

北海道において、住宅金融公庫の融資対象は、当初はブロック造住宅(補強コンクリートブロック造、簡易耐火構造)だけだった。しかし、北海道防寒住宅建設促進法の改正によって木造防火住宅への融資が開始されることになり、ブロック造住宅の建設戸数が減少し出す。そこで、危機感を持った北海道建材ブロック協会(北海道建築技術協会の前身)をはじめとして、ブロックの良さの見直しが始まる。北海道のブロックは、道内で調達できる火山れきを主原料とする地産材(軽量コンクリートブロック)であり、不燃性・蓄熱性・低価格などの利点がある。それを活かし、従来のブロック造住宅を改良した新発想の住宅を提案しようと、同協会で「“ブロック住宅ベスト5”計画委員会」が立ち上がり、圓山さんはその委員になった(当時アトリエブクの濱田暁夫さん、アトリエアクの染谷哲行さんも委員だった)。そこで圓山さんが提案したのは、いわゆるブロック二重積み(間に断熱材)に太陽熱利用を合わせ、貯熱や熱流循環を考慮した先進的な計画案だった。

ブロック二重積みの発想は、実はその数年前に設計を担当したかまぼこ工場で、水分の多い工場の内外防水の観点から、RC(ラーメン)の柱と柱の間に張壁として二重にブロックを積み間に断熱材を入れたことに端を発しているそう。既にヨーロッパでは外側のレンガと内側のRCの間に断熱材を入れる例があったことから、ブロック造でもそれができると解釈。当時、

ブロックは安価だったので、住宅でも「二重に積めば木造より安いんじゃないか、それは面白い」となった。実は、かまぼこ工場の少し後に、公庫融資を頼りに自宅をブロック造で造ったが、資金不足から一重積みの内断熱だった。雨風の強い日は室内にタライが用意されたり、ブロックの特性を活かせなかった経験から、二重積みの外断熱仕様に関心が高まっていく。

## “ブロックの圓山”へ

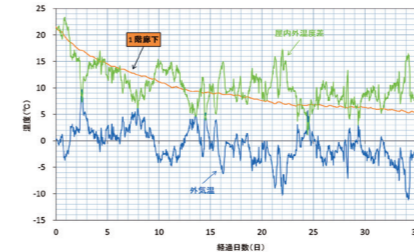
そうして、独自路線で「北海道のディテールはあるに違いない。ブロックで造るといのはあるだろう」と考え、上遠野事務所を退職、アーブ建築研究所を創設した(1978年、アトリエアークを離れ独立した染谷さんと同じ部屋でのスタートだったそう)。

それから2年後、それまで関わってきた北海道建材ブロック

にTAU設計工房・藤島喬さんや北海道建築工房・小室雅伸さんなどの建築家もブロックに取り組み、建築専門誌(全国誌)に度々取り上げられたが、中でも圓山さんは“ブロックの圓山”との異名をとるほど特徴あるブロック造住宅を次々と世に出した(依頼主や条件からブロック造が叶わないとき以外は)。

## うちそと論

こうした中で、圓山さんは“うちのそと”や“そとのうち”というフレーズを用いた論を提唱するようになる。北海道の冬の暮らしは閉鎖的で、ブロックの外断熱だと厚い外殻に囲まれた感覚がより強くなる。そこで、「あたかも外にいるような空間があるべき。外のような開放感を造ってあげないと半年間の冬はかわいそう」と思考。それには、北欧での空間体験も影響し



無暖房期間の外気温・室温の経日変化 (2013/12/3~2014/1/7)



軸のずれた家(上3点/1985年竣工/2013年度 第13回JIA25年賞)。住まい手の室温計測によって、築後25年のブロック二重積み外断熱住宅が冬の無暖房期間(12月初めから1月初めの不在時)に室温5℃を切らなかったことが判明(左のグラフ)し、外断熱の良さおよびブロックの熱容量が示された。温まった壁や床が冷めにくい「粘る家」であり、災害時の活用にも期待できる。真ん中の写真は、熱容量の効果の指標化に向けた若手の建築家・研究者および住まい手との意見交換の様子

むことが多い。「柱ってというのが、邪魔なわけさ」と、一般的なRCラーメン構造への忌避感があるよう。構造家の徐光さんの設計では、「壁式ラーメンというのを造れる。彼にしか造れない。だから9階建てでも壁式なのさ」と言う。壁式だとブロック造同様に通常のラーメンの柱型や梁型が空間に現れない。外断熱との相性もいい。長年、ブロック造に親しんできたからこそその空間へのこだわりである(近年は、PC構造も採用)。

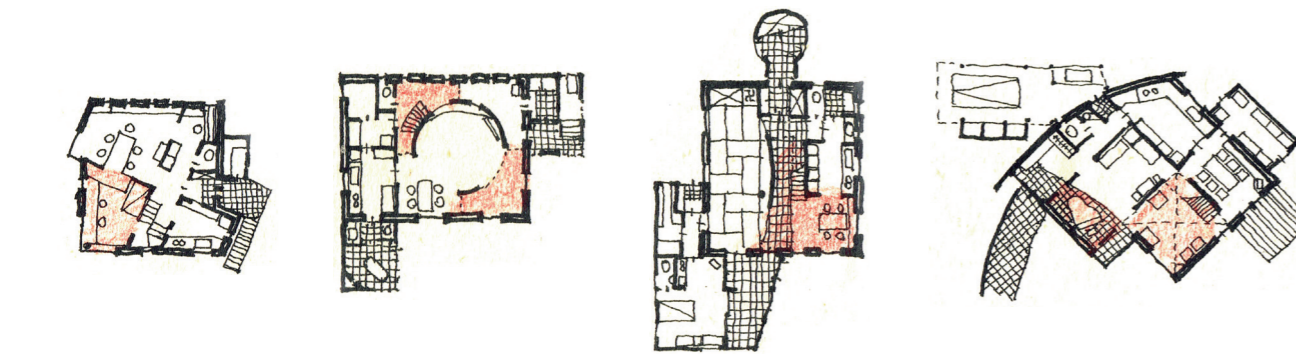
## 熱容量による快適さの指標化を

昨今、ブロック造は建築費が上がり、さらに高齢化による職人不足などで、もはや手の届きにくいものになってしまった。しかし、圓山さんは依頼者が可能な限りはブロックの使用を薦めている。そのこだわりは、“ブロック愛”と呼んだ方がいい。

圓山さんにとってのブロックの魅力とは、最初に目にしたブロック三角屋根住宅の風景を原点に、北海道の軽量コンクリートブロックが地域の特産であり、本州のものに比べて重量が軽くソフトな表情を見せることから空間が爽やかになること、そしてなによりその熱容量の大きさにある。高断熱(外断熱)によってそれはさらに生きる。冬は暖かさを、夏は涼しさを蓄えて保持するだけでなく、ブロック面からの熱の放射(放射)はマイルドで心地良さがある。とかく空気温度ばかりが目されるが、



内部に曲面を持つ家(左2点/2019年竣工/撮影:KEN五島)。徐々にブロック二重積み外断熱住宅が実現。2層分吹き抜け空間をブロックの曲面が柔らかく包み込む。道産ブロックは軽量で爽やかな印象を与えるのも特徴。「あの清涼感、爽やかさをもうちょっと表現できたらいいな」と言う。なお、この住宅も竣工時から数回に渡って温度データを採取中



独立後に設計したブロック二重積み外断熱住宅の事例。数ある平面スケッチの中より。左から、軸のずれた家(1985年竣工)、円を内包する家(1988年竣工)、通り土間のある家(1989年竣工)、陽射しを貯める家(1998年竣工)。赤く塗られた部分は吹き抜け空間であり、“うちのそと”でもある

協会の次の展開として(北海道ブロック建築普及促進協議会による)外断熱工法ブロック造のモデルハウスが完成した(ブロック二重積み)。この計画過程は、圓山さんにとってテクニカルアプローチの良い勉強になったのだとか。そして、この頃からブロックの熱容量に注目する。外断熱をした内部の温度が下がりにくく安定することを「もう信じてたね」と言う。さらに「吹き抜けができる、熱容量があればいくらでも空間を使えるって思ったね。当時の木造では温度差ができるから造りにくい。吹き抜けの広がりある空間を造るにはこれしかないって」と強く思ったそう。

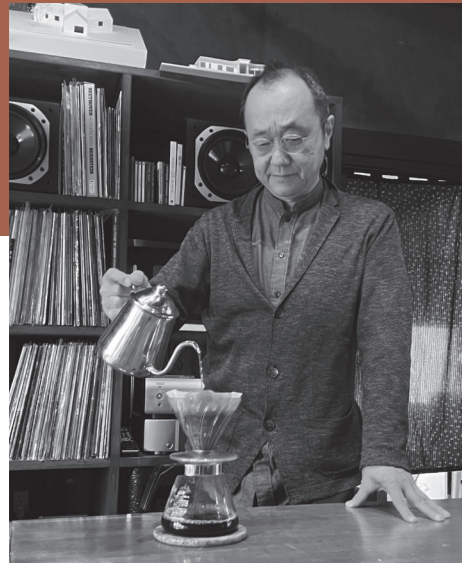
モデルハウスと同じ年に、アーブ建築研究所としてのブロック二重積み外断熱住宅も完成した。それまでは木造の仕事が主だったが、ここからブロック造が増えていく。水切りなどブロック造用の役物が揃っていないため、ディテールを工夫したり、曲面に積んだり斜めに振ったり、内部には大胆な吹き抜けをはじめ、円形の空間を内包するなど、暮らしの幅が広がるような圓山流のブロック造住宅が展開する。建築学会などからの評価も得て、ブロック造住宅の依頼者が増えていった。同時期

ているそう。そこで、“うちのそと”を造ろうと、内部に半戸外的な空間を設けるように。床暖房をした居間が吹き抜けと相まって外部のような開放感のある空間となり、暮らしをより楽しめる場ができた。なお、ここでは熱的なバッファーを狙ったのではなく(一部で試みもある)、特にブロック造は「感性で“うちのそと”がわかるようにしたかった」と言う。一方で中庭などの魅力的な外部空間も造った。開口部を介して庭(そと)を家の中に呼び込むと同時に、外壁や樹木に囲まれた中庭を外部でありながら内部的に活用できる空間に設えた。つまり“そとのうち”である。なお、この“うちそと論”はブロック造に限らず、さまざまに展開。当初の冬向きの思考から、一年を通して暮らしを豊かにするものになっていった。中でも“そとのうち”は、まちづくりの観点でも取り入れられている(パストラルタウン美しが丘の配置計画)。

## 規模の大きい建築では壁式ラーメンに取り組む

一方、規模の大きな建築では、近年は構造家の徐光さんと組

## 時代を超えて建築自体が語る、形式・秩序を作りたい



## 保科文紀

Fuminori Hoshina

合資会社 d.n.a. 代表  
JIA 登録建築家 / 1995 年入会

「100 年後くらいまでは責任を持ちたい」と話す保科文紀さん。その想いは、全ての建築は宗教建築だとの思考に裏付けられている。学生時代に着想したものがいま確かな思想となり、建築に結びつき、深化をみせている。

## 略歴

1959 年 札幌市生まれ。1983 年 北海道大学工学部建築工学科卒業。清水建設(株)入社。1989 年(株)アトリエブंक入社。2003 年 北海道大学大学院助手。2006 年 合資会社 d.n.a. 設立。受賞等：1983 年 日本建築学会北海道支部全道大学・高専卒業設計優秀作品金賞、1987 年 新建築住宅設計競技「日本の住宅・いま」1 等、1992 年 東京建築賞最優秀賞「マレーシア大使館」、2006 年 北海道建築賞「釧路市こども遊学館」、等

## 建築の原体験、悩み、目覚め

「百年記念塔の敷地内で、父のスーパーカーの後ろに乗って現場を見たのを覚えていますね」と話す保科さん。小学生の頃、父親が北海道庁の職員で北海道百年記念塔建設の担当者だった。家には製図版や T 定規などの図面を描く道具があり、身近な存在だった。そんな環境から、建築に関心を持つのは自然なことだった。しかし、大学進学では母親の希望から一旦は医学部を受験。結果は不合格だったが、翌年、北海道大学工学部に合格し、建築工学科に進むことができた。

ところが、3 年次になって悩む。「何のためにこんなもん作るんだろう。このままでいいのか」と。さらに「思想がわからなければ建築を作っても意味がない」と、文学部への転部も考えたと言う。そんな折に参加した学科の研修旅行(東京～九州)で光明が差す。丹下健三や磯崎新の建築には動じなかったが、佐世保で見た白井晟一による『親和銀行』に強く胸を打たれた。団体行動を外れ翌日も再訪し、「これを作れるなら建築をやる意味がある。こういうものを作りたい」と意欲が湧いた。

4 年次は太田實さんの研究室で年末まで卒業論文(都市計画系)を書いた後、卒業設計に着手。論文とは別のアプローチで臨ん



北海道百年記念塔(残念なことに 2023 年解体)の前で。右端が小学生時の保科さん(父親撮影)

だ。テーマは「心象現象 混沌から宇宙へ」。機能としては寺院だが、表現しようとしたのは、自己発見のために訪れた者が多様な空間(迷路など)を体験して解脱に至る、その心象であり現象。ごく短期間に仏教や哲学の書物を読み、何かが降臨したかのごとく凄まじい熱量で壮大な作品を完成させた(忙しい太田先生の指導はほとんどなく、それがかえって良かったとか)。そして、全道大学・高専卒業設計優秀作品の金賞(日本建築学会北海道支部)となった。

## ゼネコンからアトリエ系へ

就職では、アトリエ系に興味を持ちつつも求人があった清水建設(設計部)に入社。東京での研修期間に、最先端のショッパなどに出

掛けては感性を磨き、週末に友人とハケ岳で手作りしたドームハウスで施工の感覚を身につけた。その後も東京勤務で、商業施設専門の部署を経てデザインセンター(デザイン性の高い物件に特化)に配属、『マレーシア大使館』などを担当した。その一方で、雑誌『ブルータス』の企画に友人と応募し実現した空間が誌面に載り、さらにその経験を題材に『新建築』誌のコンペに挑戦して一等を取ったというエピソードも。

楽しく過ごしていたが、30 歳で北海道支店へ転勤となった。

間もなく、大学の先輩であるアトリエブंक(以下、ブंक)の秋山孝さん(当時社長)と会食する機会があり、「地元北海道で公共建築を設計してみないか」との誘いを受ける。事務所を訪れた時、ブंकの設計を統括する後藤達也さんと出会い、短い会話で「うー、これが建築家だ」と初めてリアルな感覚を得たと言ひ、「ここに来たら建築を作れる」と、転職に舵を切った。

そしてブंकに入社。後藤さんの下で多くのプロジェクトを手がけた。そのベスト3を挙げると、一つ目は原広司さんと協働した『札幌ドーム』で、世界的な建築家が建築を生む場に居合わせたのはとても刺激的だった。二つ目は彫刻家・砂澤ビッキの記念館『エコミュージアムおさしまセンター』(住居兼アトリエだった木造小学校の校舎の改修)。無茶な設計だったそうだが、現場で砂澤ビッキの魂を感じるという忘れ難い体験もした。三つ目は、ブंकの25周年記念作品集『Works of Multivalent BNK 1984-1995』の編集。設計に携わる者だからこそその視点で、さまざまな仕掛けや想いを詰め込んだ。

ブंक時代も楽しかったそうだが、15 年で節目の時が来た。

## 全ての建築は宗教建築。形式・秩序を作りたい

とあるきっかけでブंकを離れることになり、2 年ほど大学教育に携わりつつ独立準備を進めた。事務所用の物件探しの中(ブंक時代の同僚とシェア)、かつて質屋だった大正13年築の古民家に出合う。煉瓦作りの蔵に惹かれ、持ち主に賃貸借を交渉。改修の許可も得て、学生の勉強も兼ねた実測や造作を彼らと行い、蔵はアートギャラリーにし、カフェも備えた空間に再生。そこに2006年、自身の設計事務所、合資会社 d.n.a. を開設した。

これまで個人住宅から公共の建物までを手がけて、「施設ではなく建築を作りたい」との想いと「全責任を自分が負うこと(言い訳をしない)」を心得にしてきたよう。そして、歳を重ねるうちに、「全ての建築は宗教建築である」と思考するように。いわゆる宗教ではなく、住宅であれば、住まい手の要望だけではなく、見えない大きな何かを感じて作る建築。「だから、少なくとも100年後くらいまでは責任を持ちたい」と言う。自分の設計した建物が100年後に残っていたとして、使用者が変わり、当初の機能はなくなっているかもしれない。それでも責任を持つために、文章がなくても建築自体が語れ、後世にその建物に関わる建築家と対話できるような、時代を通底する形式を作り出したいと考え、取り組んでいる。表層をどう作るかではなく、「秩序を作りたい」と。こういった思想が近年の作品に込められている。

美唄市合同墓(右2点/2023年竣工/右撮影:前澤良彰)。印象的な参拝を演出する象徴的な空間。発想は「その場で降りてきた」と言う。左はモニュメントの形状の根拠となる幾何学の図。常に原寸でも考えることから、最終形は現場で決まることも多いとか



恵弘寺(上・右/2023年竣工、畠中秀幸さんとの共同設計/撮影:前澤良彰)。1階を参道、2階を本堂に。伝統工法と現代工法の融合であるが、伝統工法だけでも成立する形式とのこと。蛙股の装飾は蝦夷赤蛙(写真右)、蝦夷雪うさぎ、蝦夷モモンガがある

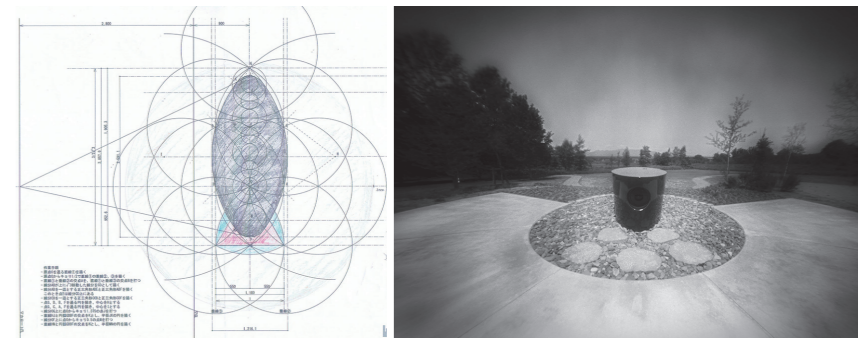


## 時と経験によって洗練、深化

最近作の仏教寺院『恵弘寺』では、モダニズムに伝統建築を融合させることをテーマの一つとして、神聖な幾何学を考え出し、時代を超えるような形式を創出した。また、寺社建築に特有の蛙股には小動物の装飾を大工さんに施してもらった。それは小さくて弱いものが世界を支えるイメージなのだそう。

『美唄市合同墓』では、特定の宗教色を帯びずに故人を偲ぶ神聖で普遍的な空間に挑んだ。人の生と死、尊厳を表す形式として、入念なランドスケープと人工の丘に設える黒御影石のモニュメント(下部にお骨が入る仕組み)を考案。モニュメントは山並みに向かう軸線を持つ楕円形で、それぞれに意味ある中心を持つ複数の円の重なりや関係性によって導き出した。また、石には周囲の山や空が映り込む。「靈魂はあの山々に行き、その後は宇宙に行くんだよ」との想いが込められているようだ。

創作の根底にある世界観は、卒業設計が予言したかのようで、「僕、戻っていると思います」と言う。当時は意味もわからず取り組んだそうだが、重ねた年月や経験によって確かな思想となって普遍性を帯びた建築に結びつき、洗練されながら深化(進化)しているよう。最後に、自身が思う代表作について尋ねると、「常に最新作です」と、迷うことなく語った。



## 野村和也

Kazuya Nomura



一級建築士事務所 ノムアーキテツツ 代表  
2023年入会

### 略歴

2009年 北海道芸術デザイン専門学校卒業。2012年 北海道工業大学卒業。有限会社タウ設計工房入社。2018年 ノムアーキテツツ設立。2022年 北海道芸術デザイン専門学校非常勤講師。

### 近作三題

#### 『バックロジ社屋』

釧路市を拠点にパッケージデザイン等の商品を手がける企業の事務所社屋。新たな仕事場の提供として在宅ワーク利用者のためのコワーキングスペースを併設している。車通りの多い国道沿いに面しており、植栽スペースと築山を緩衝空間として内外とを適度な距離感で保ち、施設利用者を大らかに受け入れながら自然なアプローチが可能となる配置計画とした。

#### 『伏古の家』

住宅地の中で間口が狭く奥行きの長いうなぎの寝床のような敷地に立地する住宅。在宅ワークと育児・家事スペースが重なり合いながらも干渉の少ない動線計画とした。

#### 『小樽の家』

正面に道路を挟んで大きな公園のある周辺環境の中で自然豊かな外部と私的な内部の関係性を中庭と吹抜によって調整した住宅。



バックロジ社屋



伏古の家(撮影：国兼光矢)



小樽の家

## 弘田亨一

Koichi Hirota



弘田亨一設計事務所  
JIA 登録建築家 / 2015年入会

### 略歴

2000年 北海学園大学工学部建築学科卒業。積水ハウス株式会社。2004年 ヒココニシ設計事務所(現ヒココニシアーキテクチャ)。2010年 弘田亨一設計事務所。2018年 北海道芸術デザイン専門学校非常勤講師。受賞等：2022年 きらりと光る北の建築賞「西町の家」、2024年 JCD北海道支部デザインアワード窪田賞「きらめきランドリー」、等

### 住宅2作品

#### 『東森の家』

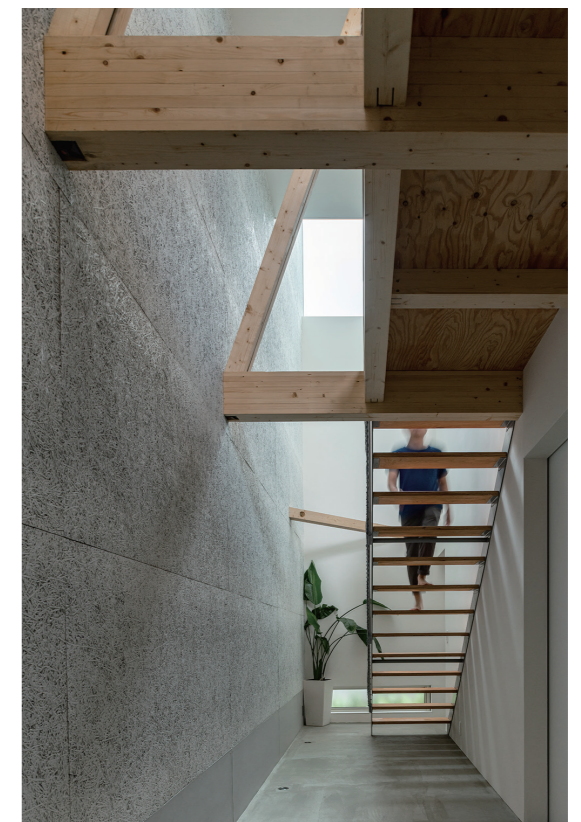
港町にある老夫婦のための住宅です。長く愛された既存住宅の柱間をトレースしてグリッド状にボリュームを配置しました。定期的に配列した柱や筋交の構造体は、内部でさまざまな居場所を与え、三日月型の外部空間が周辺環境との緩衝帯となります。外壁に町産の道南杉を用い、内部に既存住宅の構造材であったクリやブナを再利用しました。既存の建物が持つ歴史を引き継いでいく建築の在り方を模索しました。

#### 『西町の家』

敷地面積26坪、間口5.2mの狭小地に建つ住宅です。奥に長いボリュームをさらに縦に2つに分割し、その一方を3層からなる吹抜とし、大きなハイサイドライトによってライトウェルとしての機能を与えました。ライトウェルの光に寄り添い計画した諸室は、周辺環境に捉われない落ち着いた内部空間となっています。



東森の家



西町の家

## 堀尾浩

Hiroshi Horio



堀尾浩建築設計事務所  
JIA 登録建築家 / 2007 年入会

### 略歴

1965年 北海道生まれ。1990年 日本大学大学院建築学修了。1990年 (株)日建設計入社。1992年 (株)アトリエブランク入社。2007年 堀尾浩建築設計事務所開設。

### 自然とともにつくる

美唄市東明で、外作業をしながら自然とともに過ごす時間が増えている。美唄市は、1913年に開坑された炭鉱の変遷とともに栄え、1972年の閉山以降、急速な人口減少と向き合いながらも豊かな農作物の産地として知られる街となった。東明地区は、隆盛期の炭山(ヤマ)と市街地の間に位置し、建ち並ぶ炭鉱住宅の風景に当時の賑わいと人々の営みを想像することができる。現在は、栄小学校の跡地を活用した「アルテピアッツァ美唄」が、その歴史や人々の想いを伝え、次世代へつなげる役割を担っている。近年、住み手を失った炭住は、毎年、数軒が解体され、残された空き地には新たな草木が芽吹き、自然な姿を辿るその生命力にはいつも驚かされている。この草木が生長し雑木林となった数十年後、この地の風景に人々の営みはあるのだろうか。密集した樹木を間伐し、自生する幼木を移植、土に触れながら、自然と対話する暮らしのあり方に想いを馳せ、その居場所づくりの道程を楽しんでいる。



炭鉱住宅が立ち並ぶ東明地区と栄小学校(現アルテピアッツァ美唄)



自生する幼木を移植し数十年後の変化を想う



円環を手掛かりにひろがる多様な時間



## 鳥海良晴

Yoshiharu Toriumi



一級建築士事務所 とりエイティブ  
1988 年入会

### 略歴

1955年 阿寒町生まれ。1979年 北海道大学建築工学科卒。1980年 岡田新一設計。1982年 アトリエブランク。2009年 北電総合設計。2023年 とりエイティブ設立。受賞等：1996年 北海道建築賞、1998年 日本建築学会作品選奨「幕別町保健福祉センター」、2001年 北海道赤レンガ建築奨励賞「上川町山手地区」、2019年 北海道優秀照明施設賞「赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設」、1992年 北海道建築奨励賞、2020年 第19回 JIA25年賞「平取町立二風谷アイヌ文化博物館」

### 「残るモノ」と「消えるコト」の間で

#### 「残るモノ」建築空間

主題に潜む精神性を空間化したいです。建築は時間をかけて永く残るモノを作る行い。「二風谷」はアイヌをとりまく環境的構造を内部空間化し、外観は風景に屹立させ自然と応答する場の秩序を作ろうとしました。「赤平」はすでに強い場の秩序があったので建築を脇役に置き、立坑やぐらと産炭地の記憶を蘇らせる場を作ろうとしました。

#### 「消えるコト」現代舞踊ダンス

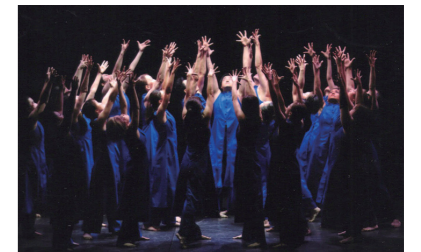
舞踊歴35年。個人、所属団体で舞台作品を発表しています。所作は一瞬で消え記憶の中にもみ残ります。建築と真逆の行い。「残るモノ」が故に苦しむ建築設計。「消えるコト」が故に心を開放させる舞踊ダンス。



平取町立二風谷アイヌ文化博物館(1992年北海道建築奨励賞・2020年第19回JIA25年賞)



赤平市炭鉱遺産ガイダンス施設(2019年北海道優秀照明施設賞/撮影:酒井広司)



現代舞踊ダンス発表(2015、2016、2018、2021年)

## 第6回北海銅機デザインアワード 開催・結果

- ・一次審査(書類審査) 2023年10月10日
- ・二次審査(現地審査) 2023年11月5～6日

最優秀賞(1作品) 各賞 作品名/設計者

○HOUSE03 - 盤溪の家/佐藤 圭・三木 万裕子 [写真①]

優秀賞(2作品)

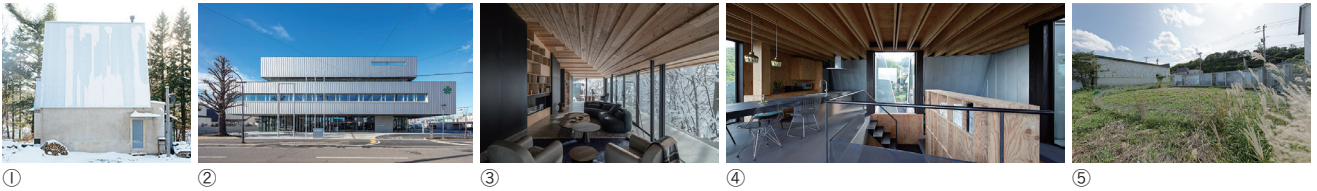
○芽室町役場庁舎/加藤 誠・池村 菜々・太田 豊 [写真②]

○Gentō / 須藤 朋之・山脇 ももよ [写真③]

入賞(2作品)

○銀斜壁の境界/高野 現太・山脇 克彦 [写真④]

○夏の家/久野 浩志 [写真⑤]



## JIA スクールが再始動

- ・第1回 2023年8月4日 (KB)  
平尾稔幸「81日間世界一周建築紀行」  
豊嶋守「カルロ・スカルパへの旅」
- ・第2回 2024年3月22日 (U-cala)  
川人洋志「建築人生劇場」
- ・第3回 2024年4月25日 (Zoom)  
「実例に学ぶ 設計監理業務のトラブルとリスクマネジメント」

## 各種交流企画を開催

- ・2023年8月18日  
親睦ビール会(札幌グランドホテル)
- ・2023年12月8日  
デザイナーズパーティー(グローヴウィズアクアスタイル)  
※デザイン各団体との共催
- ・2024年1月11日  
新年交礼会(札幌グランドホテル)
- ・2024年2月2～3日  
近畿支部住宅部会との交流会(札幌-旭川)

## 法人協力会による企画が各地で開催

- ・2023年9月26日  
旭川地区会商品説明会(大雪クリスタルホール)
- ・2023年10月24日  
函館地区会商品説明会(サン・リフレ函館)
- ・2023年11月22日  
スタッフ勉強会(札幌グランドホテル)
- ・2024年3月15日  
法人協力会合同セミナー(Zoom)

## 事務局員の交代

北海道支部事務局員を長年務めていただいた伊賀たけ美さんが、2024年3月をもって退職されました。支部の運営を明るく献身的に支えていただきましたことに深く感謝申し上げます。新たな事務局員として、伯谷薫さんに2024年7月から勤務いただいております。よろしく申し上げます。

## HOKKAIDO ARCHITECTS の横顔 vol.04

発行日 2024年7月31日

発行人 小西彦仁

発行所 公益社団法人 日本建築家協会 北海道支部  
〒060-0806 札幌市北区北6条西6丁目2番地 設計会館701号室  
TEL.011-788-7491 FAX.011-788-7470  
URL.http://www.jia-hok.org/

編集人 堀尾浩 [広報グループ]

制作協力 登尾未佳 (編集制作)

山崎一平 (デザイン)